

水稻の後期栄養対策

令和5年産米は、登熟期間の猛暑の影響で大きく品質低下し、玄米タンパク質含有率も低下しました。このことは、高温によって栄養凋落が見られたものと思われます。長期予報では今年の夏も高温が予報されています（図1）。登熟期の栄養条件を維持するために、追加の穂肥を適期に施用することと適正な水管理に努めてください。

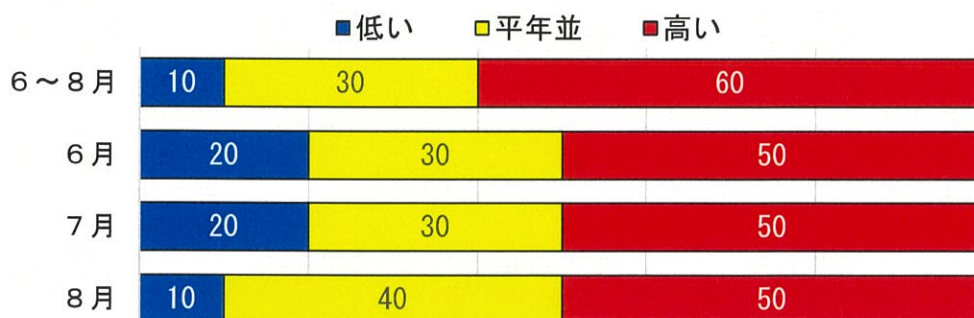


図1 5月21日発表の北陸地方の3か月予報（気温）

1. 県内の水稻施肥の実態

（1）全量基肥施肥および有機質肥料利用割合の増加

県内でも全量基肥（基肥一発）施肥の面積割合が6割を超えるようになりました。そのうち、有機質肥料が3～5割入った全量基肥肥料の利用割合が半分以上になっています。有機質肥料は基肥分に含まれ、全体として穂肥分の施肥窒素量の割合が少なくなります（図2）。猛暑が予想される場合は、栄養凋落による白未熟粒を増やさないよう水稻の栄養状態を保つために追加の穂肥が必須となります。

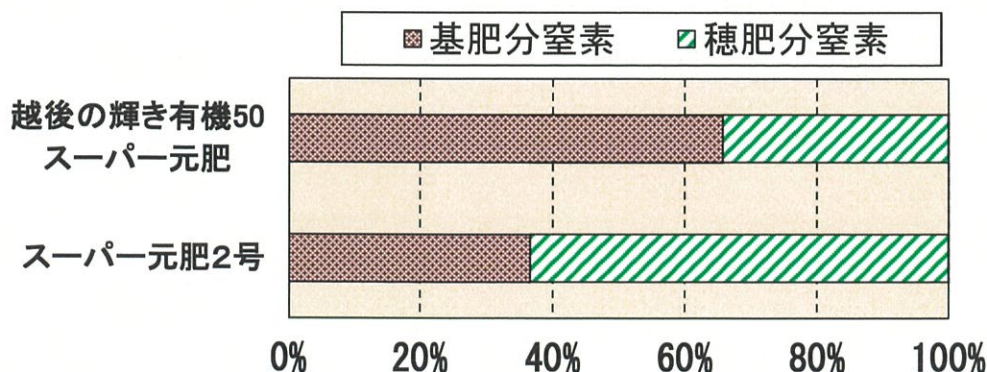


図2 越後の輝き有機50 スーパー元肥とスーパー元肥2号の窒素成分割合

(2) 特別栽培米の慣行栽培基準の見直し

令和6年産の特別栽培米から慣行栽培基準が見直され、コシヒカリは窒素成分7kg/10a（一部地域は7.5kg）、うち化学肥料3.5kg/10a以下となりました。越後の輝き有機50シリーズの全量基肥肥料を利用している生産者は、概ね10a当たり2袋40kg程度（窒素成分4.8kg）の施用に留めていると思われます。高温が予想される場合は、化学肥料で窒素成分1.1kg/10aの追加穂肥が可能になります。

2. 出穂期直前の穂肥施用

高温の年には、出穂前に葉色が急激に低下します。化学肥料体系では出穂期3日前のSPAD値が31以下のとき、有機質入り肥料体系では出穂期6日前の葉色がSPAD値33以下のとき、窒素成分で1kgをめやすに施用することで、基部未熟粒の発生を抑えることができます。

3. 飽水管理

登熟期に後期栄養を維持するため、図3に示す通り、飽水管理を実施し、土壌を湿潤状態に保つことで、地力窒素を有効に利用できます。



図3 飽水状態

(担い手・営農支援部 担い手・営農支援課)